

「COUINAUD 肝臓の外科解剖」

Surgical Anatomy of the Liver Revisited

C. Couinaud 著

名古屋大学教授・第1外科 二村 雄次 訳

茨城県立中央病院院長

長谷川 博

畏友・二村雄次教授のご指導の下に日本語になった Couinaud 先生の著書を拝見し、改めて親友 Couinaud 教授の偉大さを痛感した。また、すばらしい日本語にお化粧！と言うよりも、新しい本をクリエートされた二村教授ご一派のセンスとご努力に改めて敬意を払いたい。

訳者序文にあるように、私は“Le Foie — études anatomiques et chirurgicales”という Couinaud 先生的不朽の名著(Masson & Cie, 1957)を読みかじって肝臓の外科を始めた。フランス語というのは、日本語と言語体系が違い、考え方に飛躍があってよく面食らった。1つの極端な例が数列で、91と日本語ではサラリと言うところを、フランス語では4×20とeleven(11)と言う。この複雑な言い方のほうが間違いがなく、かえって早いというのがフランス語の真髓らしい。したがって、翻訳途中で日本語に訳し切れない暗礁に乗り上げたときには、二村先生はCouinaud先生と頻回な直接面接ないし頻繁なFAXのやりとりがあった由。このような翻訳作業は前例がないのではないかと尊敬している。

1981年に私がさくらんぼ模型と

いう単純な、いや超単純な肝の模型のスライドを持ってフランスの外科学士院の招待講演に呼ばれたとき以来、Couinaud先生は私を弟のように面倒をみてくれた。そのお蔭で1982年から学士院正会員に推挙されたが、彼はフランスでは奇人扱いされている面と、超博学で尊敬されている面とがある。

まず、奇人扱いの点であるが、hilar plateが左にあって右にないのは変だと私が質問したところ、“明朝9時にあの安宿に迎えに行くから”との返事。翌朝サンルイ病院に彼の車で連れてゆかれ、いきなり床屋のおじさん風の(土産物の人形的な)人が、われわれ2人にお厚いマントを着せてくれた。入った部屋は解剖室か霊安室、早速“Allez!(やろう!)”結局、肝実質を割らずにhilar plate的な所には入れないことがわかったが、もう一度Couinaud先生が“Allez!”、おじさんが“Oui”で終わり。病理医もおらず。その晩、自宅でご馳走になったが、そのときの服装は手術(?)のときと同じで、なんとなく私は食欲にブレーキがかかった。

超博学な点はバリの医師皆が認め

るところで、学士院の定例会でも、最高の椅子が指定席だったようだ。また外来～臨床でもCouinaud教授の退官前には、シンパの人が数人いつもいて、私に対して教授を褒めたたえていた。しかし、肝切除の実際の経験としては乏しい模様で、例えば上述のhilar plate(左)を一括りで離断すると糸が外れる危険がある、とは書いてない。この点は、常識で対応すればよい。

本書を繙いて驚くことは、ヒトの胎児期の肝の発生に関する形態学の引用文献が実に豊富なことである。これは、われわれが術前の画像診断で、血管系の奇形や胆道の発生異常に由来する病態に遭遇した際にどれほど参考になるかわからない。

本書は肝臓外科を目指そうとしておられる若い医師の方々のみならず、学問の深淵を覗く楽しみをこれから始めようとしておられる方々にも、座右の書として、折に触れて繙かれてよい名著であると信じて疑わない。

● B5 頁200 図163 写真16
原色図11 1996 定価7,828円
(税込) 千400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)